

# 平野又右衛門尉無念

またえもん のじょう

かつては、室町幕府より出雲・隠岐・石見・伯耆・因幡・備中・美作・備後の八か国（現在の島根県、鳥取県、岡山西部・北部、広島県東部）の守護に任せられるほど強大な勢力を誇った出雲の大名・尼子氏は、永禄三年（一五六〇）、当主の尼子晴久が病により急死し、嫡男・義久が跡を継ぐと、中国地方の覇権を争う安芸（広島県）の大名・毛利元就が出雲侵攻を本格化させ、尼子氏の諸城を次々と攻略し、永禄六年には尼子氏の本拠地である月山富田城を包囲します。

こうした中で永禄八年（一五六五）頃、義久はかつて恩義のあった美作の小田草城（鏡野町馬場）の斎藤玄蕃に呼びかけ、救援を行わせようと考へ、家臣の平野又右衛門尉久利に使者を命じます。

平野又右衛門尉は、「尼子氏分限帳」という後世に書かれた史料の中で、一万八千石をあてがわれる御手廻り衆（側近）の筆頭で、別の書物によれば、尼子氏の一族で、剛勇の士であった尼子国久・誠久父子を肅清する際に、晴久の命令で国久を待ち伏せして殺害しています。「久利」

の名も晴久から一字もらったと思われる、こうした史料などから、晴久・義久からの信用の厚い側近であったことがうかがわれます。

「陰徳太平記」という軍記物語では、又右衛門尉は、「現在近国の侍たちは毛利に従っており、この状況の中で斎藤氏が味方につくはずはない」と主張しますが、義久の命令に背くこともできず、三人の家来を連れて城を出て、小田草城へたどりつきます。そして、家来を遣わして事情を述べ、翌日城主の斎藤玄蕃に会うため城の中に入ると、甲冑に身を固

めて太刀やなぎなたを構えた二百余人の兵に取り囲まれてしまいます。こうした状況で、又右衛門尉も斎藤玄蕃が味方してくれないことを悟り、ここで戦って討ち死にすることも口惜しいと思ひ、玄蕃に許しをもらって義久にこの状況を知らせる手紙を書いて家来の一人に持たせて国元に帰し、自らはこのまま手ぶらで帰ることを恥じ、玄蕃らの目の前で腹を十文字に切り、自害して果てました。残る二人の家来たちも、これに倣い互いに刺し違えて亡くなりました。玄蕃はこの主従三人の首を、当時毛利家が月山富田城攻略の本陣としていた宍道湖畔の洗合（荒隈）城（島根県松江市）へ送り届けたといわれています。

「尼子義久家臣人数帳」という史料には、又右衛門尉と共に亡くなったと書かれた馬来弥七郎という人物がいます。この人物は又右衛門尉の副使として赴き、共に自害したとも

伝えられます。

かつては中国地方西半分を征圧し、大名として君臨していた尼子氏も、翌永禄九年（一五六八）に毛利方に降伏し、戦国大名としての尼子氏はここで滅亡してしまいます。

今年、平野又右衛門尉が小田草城で亡くなったから四五〇年の節目の年にあたります。こうした機会に思い出すことが、主家のために忠義を尽くしてこの地で果てた又右衛門尉主従の供養の一つにでもなれば幸いです。

参考資料：『鏡野町史』通史編、『新釈陰徳太平記』、『戦国大名尼子氏の興亡』、『戦国大名尼子氏の伝えた古文書』、『尼子毛利合戦 雲陽軍実記』



小田草城跡（馬場）



斎藤玄蕃の墓と伝えられる石塔（馬場）



洗合城跡（島根県松江市）

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733